

論文審査の結果の要旨

報告番号	甲 保 第 16 号 乙 保	氏 名	南川 貴子
審査委員	主 査 谷岡 哲也 副 査 雄西 智恵美 副 査 森 健治		

題 目

Increasing upper-limb joint range of motion in post-stroke hemiplegic patients by daily hair-brushing (急性期脳卒中患者の日々の整髪動作訓練による上肢関節可動域の拡大)

著 者

Takako Minagawa, Ayako Tamura, Takako Ichihara, Yukari Hisaka, Shinji Nagahiro
2015年6月発行British Journal of Neuroscience Nursing, 11(3), 112~117 ページに掲載
済

要 旨

脳卒中患者は、運動機能の障害が急性期から発生し、機能障害に伴い慢性期には関節可動域の縮小を伴いやすい。そこで、脳卒中発症後1~2日目の急性期の循環動態の変化が激しい段階から整髪動作を組み込んだ積極的介入を試みた。対象者は初発脳卒中の患者62名で、対照群は通常の看護ケアと理学療法士・作業療法士によるリハビリテーションを行った。一方、介入群は通常のケアに加え1日1セット30回のヘアブラシを使用した整髪動作の支援を、無理な動かし方がないように注意しながら行った。評価は、他動的関節可動域角度を用い、測定部位は、肩関節の屈曲・外転・外旋、肘関節屈曲、手関節の屈曲・伸展の6項目であった。測定日は、発症後1~2日の初回と初回から6日目であった。最終的な対象者は早期退院により測定できなかった10名を除外した対照群26名と介入群26名が研究参加者であった。その結果対照群の可動域は、初回に比べ6日目に麻痺側肩関節外旋角度が有意に低下した($p=0.046$)。一方、介入群では、6日目の肩関節外転角度が有意に拡大した($p=0.002$)。また介入群が麻痺側肩関節外転角度($p=0.001$)と肩関節外旋角度($p=0.035$)において有意な関節可動域の拡大を認めた。従来脳卒中急性期には、患者管理の技術の向上により、近年では発症直後からリハビリテーションを行うことが通常となり始めた。脳卒中発症直後からの看護師が行う清潔支援の一つである整髪動作を組み込んだ積極的介入を行い、麻痺側上肢の肩関節外旋と外転の可動域制限の予防ができることを明らかにした。この成果は、機能改善と運動能力の再獲得が難しい脳卒中患者の上肢の運動機能低下予防と、生活の質の向上に寄与する。今後の脳卒中患者の医療・看護を考える上で、その社会的意義は大きく博士の学位授与に値すると判定した。